市政会視察報告　　20番　石川信生

H29－5－18（木）埼玉県入間市「小中一貫教育について」

入間市という町についても余り知識が無かったが、"狭山茶"と言えば、茶として古くから栽培されており、武蔵野の面影を残しており、起伏に富んだ地形である。今は、自然環境に恵まれた住宅都市として、発展している。

小中一貫教育を取り入れた動機の1つに、かなり学校が荒れ、生徒もなかなか落着かないところがあり、「何とかしなくては」との機運があった。まず県教育委員会の委嘱を受け、小中一貫教育推進モデル事業のモデル校として取組んできた。その後文部科学省より調査研究の委託を受けた。これが平成25年度であり、翌年から全中学校区小中一貫教育が始まった。主な取組は、「教職員の交流」として、合同研修、指導計画策定をし、「乗り入れ授業」として、小学校から中学校へ、中学校から小学校へと先生が時間を決めて、授業を行う。「子供の交流」として、合同授業あいさつ運動や各種行事を行う。又「地域との交流」として地域の行事に参加する、という事を行ってきた。小中一貫教育のねらいは、教師の資質の向上（教師の交流）、人間力の育成と6年生の不安の軽減（子どもの交流）が上げられ、学力向上、不登校減少などにつながり、豊かな人間性を作り上げてゆく。この制度によって不登校児童生徒は、確実に減少した。小6→中1での不安は、7%減少し、保護者の88%が良いと評価している。これまでの成果としては、9年間の学びと育ちの連続性を大切にする意識、小中お互いの良さを認め合う意識から小中教職員の協働意識の向上、小中学校生活の落ち着き、不登校児童生徒の減少、中学校への不安軽減など児童生徒の不安感が軽減された。

今回の視察に立ち会ってくれた東町小学校、中学校の校長先生初めとする教育委員会の人達の生き生きとした姿が印象的であった。日々が充実した教育を続けているという事がにじみでているといった事を強く感じられ、こゝで育つ子どもさんは、幸せだなぁ　なんて思いであった。

又教育広報"いるま"が発刊されており、広報活動にも力が入っているところを見せつけられた。今や11中学区全部に取り入れられている。この取組のための意識改革には、「5年かかった」という小学校長さんの言葉が印象的であった。

H29－5－19　東京都西東京市「下野谷遺跡公園」について

西東京市は、東京都であった、田無市と保谷市が合併した市であるが、武蔵野台地のほぼ中央にあり、面積は15.75km²と知立と変りない。人口密度は、ほぼ3倍12千人/km²である。古くから青梅街道の宿場町という側面も持っており、交通の便も良く交通の要衝となっており、都心部のベットタウンとして発展してきた。

下野谷（したのや）遺跡は、縄文時代中期（今から5千年～5千年前）の集落跡であり、南関東では傑出した規模と内容を誇っている。集落には、土坑（墓と考えられる穴）群のある広場を囲むように、住居跡や掘立柱建物（倉庫などと考えられる建物）群などが並ぶ形で構成されており、縄文時代中期の典型的な「環状集落」という構造をしている。さらに、こういった環状集落が谷を挟んで複数存在しており、「双環状集落」と呼ばれる拠点的な集落の特徴がある。このような形態や出土している土器から分かる集落の継続期間が1000年間と非常に長く、また住居跡や土坑が密集して見つかっていることから、石神井川流域の拠点となった集落だったと考えられている。

このような遺跡で、調査が重ねられる中で、縄文時代の大集落の存在が徐々に明らかとなり、市民の関心が高まり、平成19年に下野谷遺跡公園として開園した。面積3250m²。都市化の進んだ市街地に、縄文時代の大集落がほぼ全域残されていることは非常にまれであり、遺跡の規模も大きく内容も豊かであることから、平成27年には、未来に残すべき貴重な文化遺産として、下野谷遺跡公園を中心とした西集落の一部が、国の史跡に指定された。

このように史跡として価値があるのだが、宅地開発でそのまま住宅が建てられてしまっており、徐々ではあるが、買取を行ったりもしている。面積が拡大であり、草が覆い茂って、草刈りが大変。園内でのイベントを開催しているが、多くの人々が、イベント以外の時にも訪づれ、見たいを作り出すには、どうしたら良いか。資料館などの建設も必要であるし、観光との結び付きをどうするかとの課題を持っている。

今当知立市の荒新切の遺跡も、公園計画があるが、見たいとともなった、いつも人が訪づれる公園作りとしなければ、ならない。遺跡公園ありかたに考えさせられるところが大であった。